

で強行軍しました。元越山にも登っていますし、尺間登山のときは、にぎり飯三十三個を杖の先に突っかけて、帚收二ともにてかけ、山頂に泊っています。

独歩が佐伯に滞在したのは約十か月ですが、実質的には八か月にすぎません。その短期間に、これほど鼎南一帯を道遠跋涉したということは驚嘆にあらいます。

尺間山、元越山に二度も登り、本五村鉾子淵にも再度赴いてみます。

近年、県下各地で「歩こう会」が盛んに催されていますが、独歩はその先駆者であつたといつても過言ではないでしょう。

(住所 佐伯市池船三)

報告

西運寺山門の修復

— 弥生町指定文化財(建造物) —

会員 伊賀重雄

(弥生町文化財調査委員)

西運寺の山門の屋根が近年とみにいたみかひどく、その老化現象の進行に拍車をかけられているように、見る度毎に心ある人々をあげかしていた。そこで四十五年度の西運寺護学会では、山門の上壁だけでも修復して風雨から護りたいとし、一応の計画を立てて所の教育委員会に申達があつた。

これを受けた所文化財調査委員会としては、一応の検討をし、専門家に依頼して調査し、その上で討議決定することゝすめた。幸い所出身である佐伯市出納一級建築事務所をもちつてゐる出納邦弘氏にということになり、

その調査方を依頼した。出納氏は早速専門的な見地から細密な調査をし、その復旧についての意見、見積書の提出があつた。腐朽は外見以上寸す及、この際上屋を全面的に改修する必要ありとし、工費約百拾万円を要するとの算定を示された。

そこで直ちにこれを西運寺護持会の役員会にかけて、工事施行を決定、工事は蕨繁期及び多雨の時期をさけて四十六年二月頃とし、本予算は實際上屋を解いてから決定することにした。

然しいろいろな都合から今年二月十八日から工事にかけ、当初の計画に従つて先ず上屋を解体したところ、予想した以上上屋根裏極木はじめ各部の損はけしく、再見積をした結果、全工費百八拾万円を要することが判明した。工事費の不足が大きい。そこで護学会は町当局に助成方を願つたところ、不足に相当する五拾万円を補助することゝ、理解ある町議会は決議され、右陰で早速解体復旧の工事は進められたのであつた。一件の文化財保護の助成に、この様な多額の補助金支出といふことが、県下の町村にその例があるうか。弥生町議会並に執行部がこの実践は、ある意味で県下に先鞭をかけたといつても過言ではないと思ふ。

修復工事の監督は出納邦弘氏で、始終誠意の甚るる施工を進め、大工の棟梁は堂宮建築に経験ある三浦嘉吉氏(当所切細出身)、解体から修復までには亘り、誠に当を得たコンビであつた。又使用材料もきびしく選ぶ。例之は柱材などに使用した檜の材料など、今日の建築にはその入争からして困難なのに、高価なものを選定に集め、それを惜し及なく使用した。

大工工事は三月二十八日に一応完了し、私は再三是を運んで見たが、全体的な姿容はすこぶる典雅、特に尺間

根の勾配、破風のあたりのみとまり、更に仰や見る新光
榿木の整った配列など、堂宇建築の七十九型を見るように
時の経つのを忘れる。三浦氏以下六名の大工連中の、魂
のこもつた奉行に對して、心から敬意を表したい。

次の左官工事は延岡市の田中爲夫氏に委託し、四月二
日から五月四日までかかり完成した。田中氏は京都で修
業された文化財工事の専門家で、実に丁寧な一仕事と
され、最後の仕上げをしてくれたので、漆喰の手際美し
く、西運寺台地の景観一段と趣きも添え、訪れるものに
としく仰や望んでしばし立ち去り難いほどである。
会員諸氏の御来訪をお願ひ申したい次第である。

復元された山門の歴史並に西運寺の由來については、
益田先生(本会顧問、弥生町文化財調査委員)の書かれた「快
楽山西運寺」があるので、若干引用して皆様の参考にと
し度い。

西運寺の建立は、慶長八年から慶長十二年の間とされ、
三重の叡山淨運寺の阿基光譽上人の手に依つてなつたも
ので、宗旨は淨土宗であつた。爾來何回かの火災に逢い、
現在の本堂は第十一世宣譽上人が先代より奉行をうけつ
ぎその遺作を完成したものである。

山門も宣譽上人が祭願し、自ら銀三貫匁を寄附したが、
寛政十年四月十五日入腹し、その遺志を第十二世發譽上
人がうけつぎ、享和三年十一月に落慶し、約二千七百餘
工と費したと誌されてある。(大工の延人員ニセツ。人といふこと)
大工棟梁である出納佐佑源澄定は本所上小倉在の人、
銀三貫匁の大金に備する立派な山門の絵圖面が出来ず、
随分苦勞したそうである。伝え聞く延によると棟梁と側近の
二人は、名をたる寺々の山門をなぞねて諸國を遍歴し、
遂に筑前の或る寺の山門が氣に入つたので、その山門を

建築した棟梁をたすね、山門の絵圖面の秤借を乞うたが
断られた。詮方をく附近へ宿に数日間滞在し、納得す
くまで研究して寸法書き作り持ち帰つて着工、以承毎
四角を木片ばかりを一年有餘かかつて沢山採るの
人九ちは一体何が出来るのかと不審に思つて居た。一
本の留釘も使わずに組木の木片がつきつきに組立てられ
遂に立派な門が出来上つたので、見る人皆感嘆したとい
う。

山門竣工後、筑前の棟梁に「お陰でどうにか出来上り
ました」と言葉の礼に出掛けた所、どうせ向金大工、商
足な門は出来ていないだらうと、しぶしぶながらも「オ
ンなら一請に見に行こう」と、建立つて西運寺まで来て
門の隅々まで見た揚句、出来栄えについては一言もなく
「この大杉は伐つてはいけぬ」と忠告を發して帰つた
そうである。大杉は台風の時、風よけで、山門の倒壊を
防いでくるといふのである。

以上が佐佑の山門建立の苦心談で、私達のこのすぐれ
た先人の遺作を、いつまでも守り続けたいと思ふのであ
る。

この西運寺山門は、昭和四十四年十一月三日、弥生町
重要建築物として文化財に指定された。三手先造りの鐘
棟である。奉行した人達の名前を披露して見る。(表書き)

享和三年の落慶 棟梁 出納佐佑源澄定

副匠 神毛栄吉

大工 外十一名

水挽頭取 漆矢 要外三名

石工 工藤深吉 外二名

今回の修復の前に、大正十年に大修復をされているこ
とが、同じく棟札により判明している。

大工棟梁 廣瀬松五郎

今回の

大工 廣 一城 外四名
木橋 工藤茂三郎 外一名
左官 河津熊五郎 外二名

工事監督 出納 邦弘
大工棟梁 三浦嘉吉
大工 出納 豊喜 外四名
左官棟梁 田中為夫 外二名

(筆者住所南海部郡弥生河相水)

俳句

堅田合戦の跡を訪ふ

昭和四十六年五月十六日
佐伯史談会の堅田集会に参加して

大分探勝アルコウ会員
大分芽柳俳句会員
一子 為人 末 光 孝

琴 匠 川

水豊が葎切の鳴く洲も見えす

堅 田 川

紫に山山うつり 船育つ

城 八 幡

白い翅ふろが 誇らぬ 絵馬の鶴
空振のある径 疾し 木下閣

宇山から 展望

浮き武首が揚げし 輝燭や新樹炎ゆ

お為半蔵の比翼塚

結ばれぬ二人に 濃ゆし夏舞
玉つけぬ百合咲き 添へり比翼塚
山百合や添ふ 遂げざりし 悲恋の碑
越く春や心中 説に 託はれて
碑も 踊れ松 舞今し 音頭とる

激戦のあつた長池

薫る花や 火花散らせし 池殿女

惟治千代鶴 父子の供養塔

春惜しむ 主従自刃の 碑と 撫でて

長瀬原の千人塚

討死の血を吐き 咲く如 鬼ヶ原
敬味方ここに 埋もり 葦茂る
辰を 晒して 産し 昔嵐
鯨越といふ 溪深し 河鹿鳴く
激戦の跡に 佇み 河鹿 笛

天徳寺 宗麟の墓

香惹やも ずかば 梵字 残るのみ

(注釈 坂市町王様)

お新りー去る五月十六日、御田御地五集会に立山先生と共に、はるかに大分から参加下さり、お喜びました。市野瀬集会への私徳の形ではありましたが、詞藻のゆたかさに、会費に即興に入れた、揚がました、お許しを。 (編者)